

# 天明三年浅間焼け絵図にみる構図の変化とランドマーク

Changing Composition and Landmarks in the Historical Picture Materials of the 1783 Mt. Asama Eruption

福重 旨乃\*

Shino Fukuju

## 1. 天明三年の浅間山噴火をめぐる研究史

天明3年(1783)7月6日、信濃・上野国境にある浅間山が大噴火を起こした(天明の浅間焼け)。噴火によって発生した火砕流・泥流により、浅間山周辺だけでなく、麓を流れる吾妻川、さらに吾妻川が合流する利根川流域の村々に大きな被害をもたらした。被災村数55、流死者1600人余、流失家屋1150戸余、田畑泥入被害5055石<sup>1</sup>に及ぶ大災害となった。

この未曾有の大惨事は当時の人々に大きな衝撃を与え、多くの記録が残された。それらの記録には、領主への被害の報告、瓦版のように速報性のあるもの、物語として脚色されたもの、文字だけでなく絵図として噴火の様子を記録したもの等がある。

この噴火について、様々な立場から研究が行なわれてきた。萩原(1986~88、93、95)は天明3年の浅間山噴火に関する膨大な史料を調査し、日記類、記録類、雑記類(随筆・かわら版・訴状)等に分類した<sup>2</sup>。文献史学の立場から浅間山噴火を扱った論稿としては、大石

(1986)<sup>3</sup>、北原(1999)<sup>4</sup>、渡辺(2003)<sup>5</sup>等がある。この中で北原は、浅間山・雲仙岳噴火、安政大地震などの災害絵図を調査・分析し、災害絵図を制作者、対象、目的により、A. 為政者の災害実態把握、B. 代官・藩庁役人への被災報告、C. 個人の見聞記類(伝聞・体験の記録化と継承) D. 絵図やものがたり、かわら版など大量生産、大量消費されるもの(情報伝播、利益獲得)の4つに分類している。

また、田村・早川(1995)は萩原の『浅間山天明噴火史料集成I~V』に収録された浅間山噴火に関する記述を火山学の立場から考証している<sup>6</sup>。

さらに1979年から、浅間山噴火の火砕流(岩屑なだれ)によって壊滅的な被害を受けた鎌原村(群馬県吾妻郡嬭恋村)の発掘調査がはじまり、考古資料から噴火被害の状況が明らかになった<sup>7</sup>。1995年には群馬県立歴史博物館企画展「天明の浅間焼け」が開催され、文献史料・絵図史料・考古資料・石造物などが調査・

\*東京大学大学院情報学環

キーワード：火山、災害情報、絵図史料、浅間山、噴火、日本史

展示された<sup>8</sup>。2003年には国立歴史民俗博物館企画展示「ドキュメント災害史1703-2003：地震・噴火・津波、そして復興」が開催され、浅間山噴火についても、各地での被害の差異や鎌原村復興絵図から見る復興への道のりについて等、絵図・資料を用いた展示が行われた<sup>9</sup>。近年では、中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会による報告書『1783 天明浅間山噴火』<sup>10</sup>が刊行され、火山学・考古学・歴史学・地理学・民俗学などの分野から調査・研究がなされた。特に浅間山噴火に関する絵図（以下「浅間焼け絵図」とする）の悉皆調査（第3章第3節）が行われ、浅間山噴火に対する人々のイメージに迫っている。この悉皆調査にあたっては、浅間焼け絵図のデータベースを作成するとともに、浅間焼け絵図を1. 噴火を描いたもの、2. 降灰被害を描いたもの、3. 泥流被害を描いたものの3類型に分け、絵図の構図から絵図の系統についても言及している<sup>11</sup>。ま

## 2. 浅間焼け絵図からみる空間把握

### 2.1 構図の変化

天明3年（1783）の浅間山噴火の様子を描いた「浅間焼け絵図」は、主題から噴火・降灰・泥流被害・復興の様子を描いたものに分けられる。これらの分類された絵図にはいくつかの傾向がみられる。

1つは絵図の主題—噴火の様子・降灰・泥流被害—により描く範囲や構図が異なることである。すなわち、1. 噴火を主題としたものは浅間山の周辺を範囲とし、南側から浅間山を見るものがほとんどである。また噴火の推移を見る

た、大浦（2009）は浅間焼け絵図について、噴火の推移・泥流被害を描いた絵図の表現や構図について詳細に分析している<sup>12</sup>。

また、福重・馬場（2007）は浅間焼け絵図について、主題・範囲・方角から分類を行い、浅間焼け絵図の主題—噴火・降灰・泥流・復興—により、絵図に描かれる範囲と方角が規定されることを分析した<sup>13</sup>。さらに噴火の推移を、絵図をめぐることで表現する掛絵という表現技術を用いた絵図を取り上げ、そのような特殊な形態で作られた背景、描かれたものの分析による実際の作成年代の推定やそれらが描かれた理由を探った（福重・馬場、2008）<sup>14</sup>。

本稿ではこれらの研究成果を踏まえ、浅間焼け絵図の構図と描かれたランドマークについて分析する。その分析を通じて、構図の変化、選択されたランドマークが意味するものについて検討したい。

ために掛絵で表現するものも多い。2. 降灰被害は単独で描かれるものが少ない。噴火の描写とセットとなっているものが多い。3. 泥流被害を主題としたものは、広域もしくは一村を範囲とするものがほとんどである。噴火を主題としたものとは異なり、北および東側から浅間山を見るものが多い。一村を範囲とする絵図は被害の前後を見るために掛絵をするものがある<sup>15</sup>。また、浅間山が描かれないことがある。

次に、絵図の主題となる浅間山をはじめ、白

根山・万座山・赤城山・榛名山などの山々は、ランドマークであるとともに、絵図の範囲を設定する。浅間山北麓の吾妻川、吾妻川と合流し、上野・武蔵・上総・下総を流れる利根川等の河川も、どこまでを描き入れるかによって絵図の範囲と構図が変化する。また、中山道・北国街道などの街道、城や宿、寺社や史跡などもランドマークとして描かれる。

例えば〔図1〕<sup>16</sup>は噴火・降灰被害を主題とし、中山道沿いの浅間山南麓の小諸から碓氷峠を描き、浅間山を南から見上げた構図となる。一方、〔図2〕<sup>17</sup>は泥石流被害を主題とし、吾妻川沿いの浅間山北麓の村々から利根川との合流地点までを描き、北側から浅間山を見上げた構図となる。また〔図3〕<sup>18</sup>のように、吾妻川とそれに合流する利根川を一つの絵図に描くた

め、東側から浅間山を見上げる構図となるものがある。そのため、絵図の範囲は浅間山北麓から中山道の本庄宿・熊谷宿、あるいは伊勢崎・館林など上野・武蔵国境周辺までを描くものが多く、さらに江戸や江戸四宿の板橋（江戸を象徴する）にまで範囲が広げられる。これらの絵図ではランドマークとして吾妻川・利根川と中山道が同時に描かれる。その他のランドマークとしては、中山道の宿駅、城下町、赤城山・日光山などが描かれる。そして、ランドマークとしての江戸を描き入れることにより、絵図の構図は大きく変化する。たとえば、「閑窓雑誌」<sup>19</sup>や「太平秘録抜書」<sup>20</sup>では、見開き左上部に浅間山を描き、板橋に至るまでを描く。〔図4〕<sup>21</sup>ではより単純化し、最上部に浅間山が描かれ、最下部には江戸湾が描かれる。

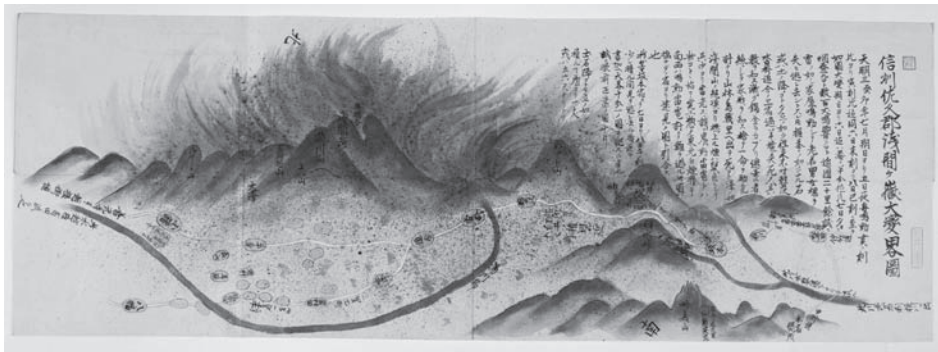


図1 信州浅間焼之図（公益財団法人三井文庫蔵）



図2 浅間焼見聞実記（東京大学地震研究所蔵）

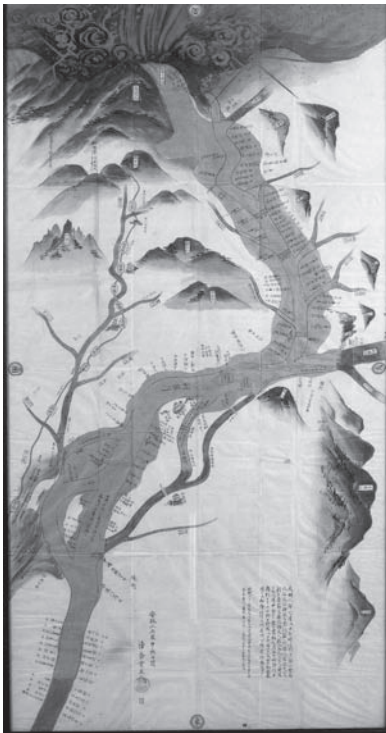


図3 浅間焼吾妻川利根川泥押絵図  
（群馬県立歴史博物館蔵）



図4 浅間山噴火に関する瓦版  
（東京大学地震研究所浅間火山観測所蔵）

## 2.2 実際の地図との比較

ここでは、浅間焼け絵図が描く村の分布、描かれる範囲を実際の地図と比較する。比較

に際しては国土地理院「電子国土ポータル」  
<http://portal.cyberjapan.jp/>を利用した。

### 2.2.1 一村図の分布

一村図が残されている村を地図に落としてみると〔図5〕のようになる。〔図5〕をみると、浅間山の北側、吾妻川と利根川沿いに分布しており、浅間山直近の麓には少ないことがわ

かる。これは、一村図が描く被害の主題が噴火そのものではなく、村を襲った泥流であることに対応している。



図5 一村図の分布

### 2.2.2 周辺図の範囲

次に周辺図の範囲をみる。周辺図の描く範囲を地図に落としたのが、〔図6〕である。浅間山の周辺を描いた絵図の多くは浅間山を南麓から見上げる。南麓図はそのほとんどが浅間山と中山道沿いの小諸から碓氷峠を中心とした信濃東部地域を描く。さらに北は信濃上野国境の棧敷山、東は上野国側の中山道松井田宿まで範囲

を広げて描くものも多い。また北からの浅間山を描くものは少ないが、北麓図は浅間山・草津・万座山・白根山に囲まれた地域を描く。

そして、南麓図・北麓図ともに、浅間山は図の主題として中心に描かれるが、実際は、南麓図は北端に、北麓図は南端に位置している。

### 2.2.3 広域図の範囲

ここでは、広域図の範囲を見る。広域図の描く範囲を地図に落としたのが〔図7〕である。広域図は主に浅間山—四阿山—万座山・白根山—赤城山—伊勢崎・本庄—妙義山に囲まれた地域が描かれるが、利根川や江戸、日光など特定

のランドマークを描き入れるために、描く範囲や方角が実際と大きくずれる。浅間山は西端に位置し、川の流域に沿って描く範囲は弓なりに湾曲している

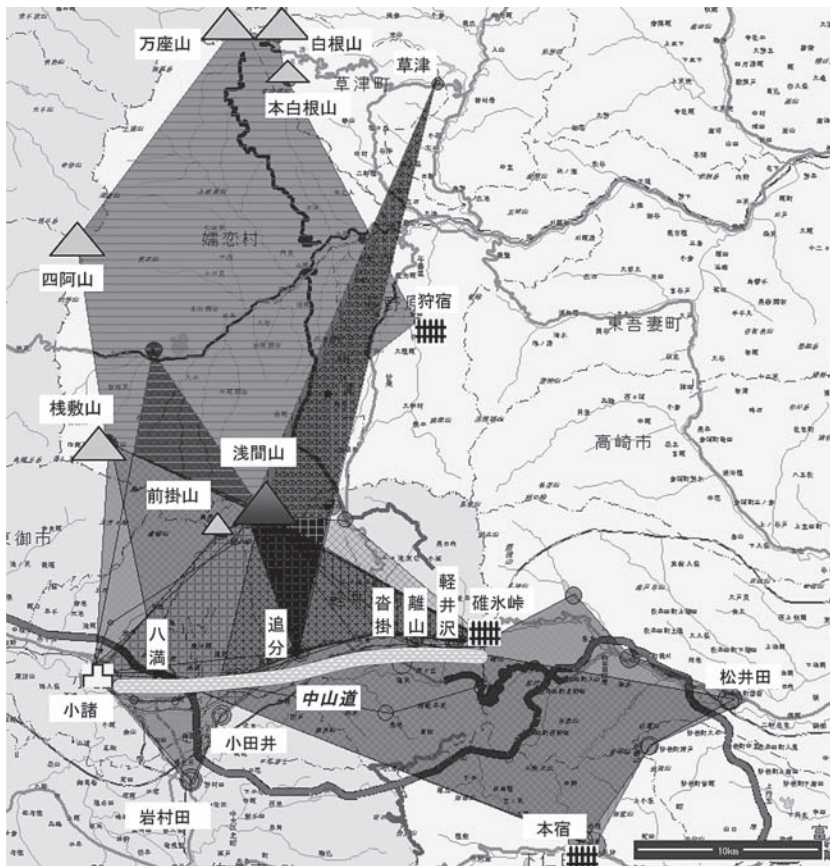


図6 周辺図の範囲

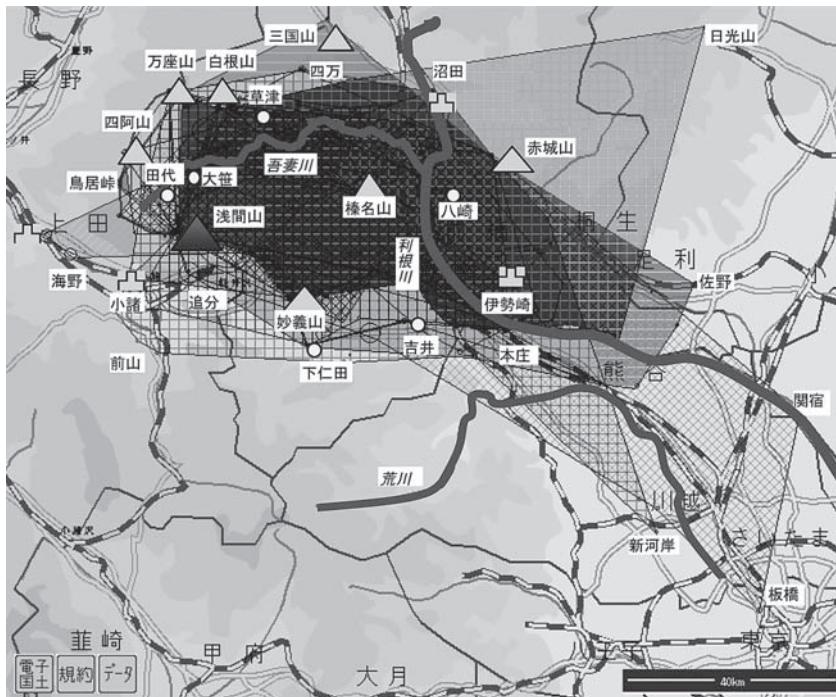


図7 広域図の範囲

#### 2.2.4 実際の地図との比較

以上見てきた絵図の範囲を実際の地図と比較する。まず、周辺図を比較したものが〔図8〕<sup>22</sup> (a・b) および〔図1〕 (a・b) である。〔図8〕は浅間山南麓から描いた絵図で、信濃国の小諸・岩村田～碓氷峠までの中山道沿いの地域を中心としている。〔図8〕を実際の地図で見ると、描かれる範囲が浅間山を頂点とし、小諸及び岩村田～碓氷峠の弓形の地域となっている。また〔図1〕は、中山道を中心とした上信国境地域を描いたものである。描かれる地域を実際の地図で見ると、棧敷山―小諸と松井田―本宿を結ぶ帯状の地域であり、中央に描かれている浅間山は実際には西寄りに所在する。

次に、広域図のうち浅間山の北麓、上野国を中心とした吾妻川流域の絵図を比較したものが〔図2〕 (a・b) である。〔図2〕の場合、絵図では範囲が吾妻川沿いに帯状に描かれているが、実際の地図上では浅間山・赤城山・万座山を頂点とした三角形の地域となっている。そして、広域図のうち利根川流域の数ヶ国を範囲とするものを比較したものが、〔図9〕<sup>23</sup> (a・b)。〔図3〕 (a・b)。〔図4〕 (a・b) である。広域図では江戸・善光寺など浅間山から遠く離れた象徴的なランドマークを描き入れ、川の流域を範囲とするために構図が大きく歪められているのがわかる。

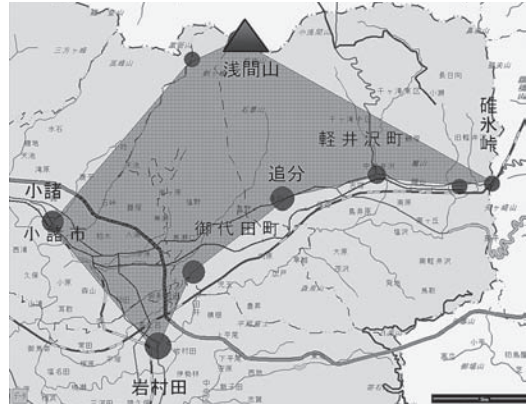
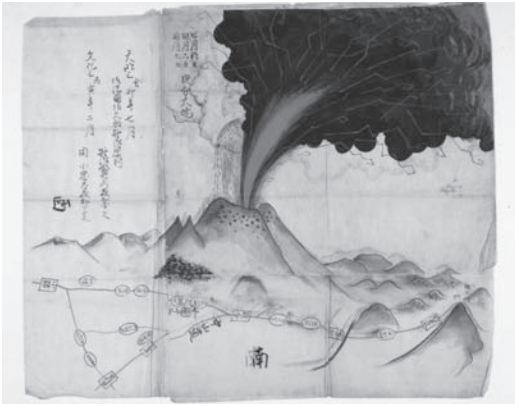


图8 (a) 信濃国浅間山大焼絵図 (長野県並木寛氏蔵) ・ (b) 同範囲図

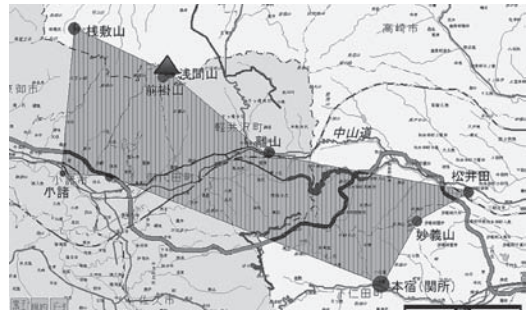
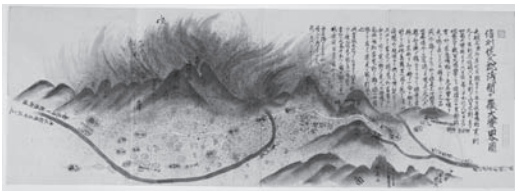


图1 (a) 信州浅間焼之図 (公益財団法人三井文庫蔵) ・ (b) 同範囲図



图2 (a) 浅間焼見聞実記 ・ (b) 同範囲図  
(東京大学地震研究所蔵)



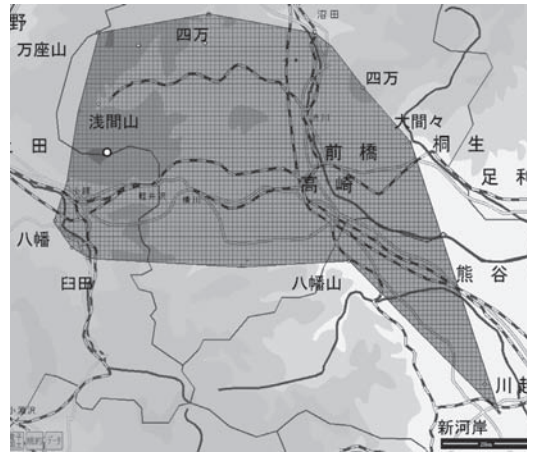


図9 (a) 天明三年信濃国浅間山焼跡絵図 (三) ・ (b) 同範囲図  
(公益財団法人三井文庫蔵)



図3 (a) 浅間焼吾妻川利根川泥押絵図 ・ (b) 同範囲図  
(群馬県立歴史博物館蔵)

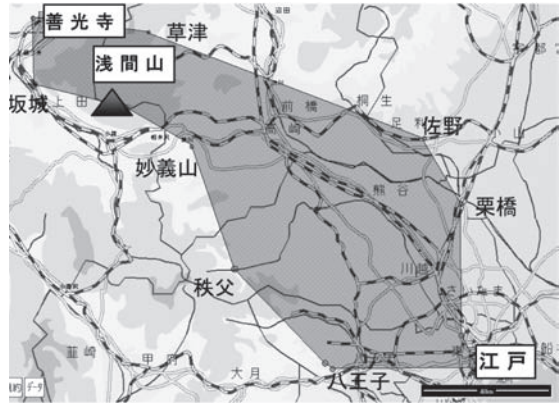


図4 (a) 浅間山噴火に関する瓦版・(b) 同範囲図  
(東京大学地震研究所浅間火山観測所蔵)

### 3. ランドマークの分析

#### 3.1 浅間焼け絵図に描かれたランドマーク

ランドマークは山、河川、街道、建造物など絵図中の目印として描かれた自然物・人工物である。ランドマークは作成者・閲覧者ともに目印として合意されるものが描かれる。そして、他の対象物とは異なり、大きくあるいは詳細に描かれるのが特徴である。また、ランドマークには絵図の範囲を区切る効果がある。浅間焼け

絵図の主題である浅間山は、ほとんどの絵図にランドマークとして描かれているが、その他のランドマークとしては、吾妻川・中山道・碓氷峠・小浅間・利根川が多く描かれ、ほとんどが自然地形である。ここでは浅間焼け絵図の一村図・周辺図・広域図に描かれたランドマークについて分析する。

#### 3.2 浅間焼け絵図のランドマークと方角

前述のように、浅間焼け絵図は描かれた方角により分類できるが、ランドマークも同様に描かれるものが異なる。北麓図には吾妻川・杵番所・大戸関所・狩宿関所・白根山・大笹街道が、南麓図には中山道・碓氷峠・北国街道・妙義山・牙山・湯川が多く描かれる。東側から描いた図は吾妻川・榛名山・赤城山・五料関所・高崎城・伊勢崎城が多く描かれている [表1]。

つまり、北麓図では上野国内の吾妻川および

大笹街道沿いの村々の泥流被害を描くことから、街道にある関所がランドマークとして描かれる。一方、南麓図では浅間山麓の信濃国側、中山道を中心に小諸から碓氷峠までの範囲を描くため、中山道、中山道から追分宿で分岐する北国街道、上信国境の碓氷峠（関所であるが神社があるため鳥居と共に描かれることが多い）、浅間山麓を流れる湯川や外輪山である牙山が描かれている。妙義山は尖った岩肌が特徴的に描かれる [図10] (a~h) <sup>24</sup>。

表1 浅間焼け絵図に描かれたランドマーク

	種別	東(15)	南(44)	北(53)	合計
浅間山	山	15	38	24	77
吾妻川	川	11	3	38	52
中山道	道	9	24	2	35
碓氷峠	山	4	19	3	26
小浅間	山	2	10	12	24
利根川	川	9	7	8	24
笠番所	施設	7	2	11	20
北国街道	道	1	18	0	19
榛名山	山	9	4	4	17
万座山	山	1	4	10	15
吾妻山	山	3	3	8	14
赤城山	山	9	3	1	13
妙義山	山	5	7	0	12
大戸関所	施設	2	0	10	12
狩宿関所	施設	0	0	12	12
前掛山	山	2	8	1	11
白根山	山	1	0	10	11
牙山	山	0	8	2	10
湯川	川	1	8	0	9
榛名神社	施設	1	0	8	9
大笹街道	道	0	1	8	9
本浅間	山	0	0	8	8
離山	山	0	7	0	7
烏川	川	3	4	0	7
水沢山	山	3	0	4	7
千曲川	川	0	6	0	6
五料関所	施設	5	1	0	6
妙義神社	施設	5	0	0	5
小諸城	施設	0	5	0	5
高崎城	施設	5	0	0	5
伊勢崎城	施設	4	1	0	5
三国峠	山	4	1	0	5
剣ヶ峯	山	0	4	0	4
浅間神社	施設	0	4	0	4
伊香保	山	1	0	3	4
碓氷川	川	3	1	0	4
花多峠	山	0	4	0	4
日光山	山	2	1	0	3
草津山	山	0	2	1	3
秩父山	山	2	1	0	3
前橋城	施設	3	0	0	3
沼田城	施設	3	0	0	3
草津道	道	2	1	0	3
沼田街道	道	1	0	2	3
北陸道	道	1	1	0	2
木曾街道	道	2	0	0	2
五料河岸	町・都市	0	2	0	2
安中城	施設	2	0	0	2
大戸道	道	1	0	1	2
鳥居峠	山	1	0	1	2
上田城	施設	0	1	0	1
忍城	施設	1	0	0	1
館林城	施設	1	0	0	1
栗橋	施設	1	0	0	1
板橋	町・都市	0	1	0	1
江戸	町・都市	1	0	0	1

方角（ ）内の数字は絵図の点数

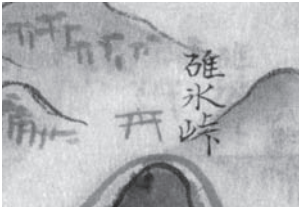


図10 (a)



図10 (c)

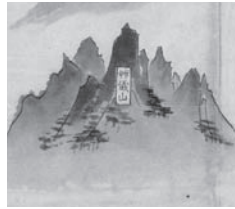


図10 (d)



図10 (e)

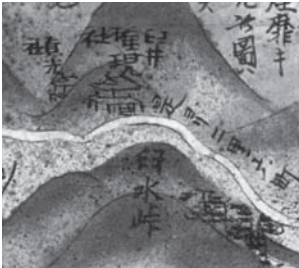


図10 (b)

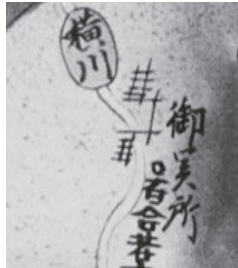


図10 (f)



図10 (g)

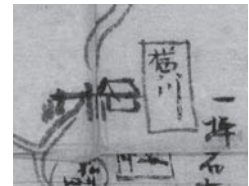


図10 (h)

図10 ランドマークとして描かれた碓氷峠 (a・b) ・妙義山 (c・d・e) ・横川関所 (f・g・h)

そして、東側から描いた図は広範囲になるため、前橋・沼田・高崎・伊勢崎の城がそれぞれの地名を示すランドマークとして描かれる。五料関所（河岸）は烏川と利根川の合流地点であ

り、日光例幣使街道の関所であるが、上野国の東西を結ぶ地点として重要視されていた。榛名山・赤城山は上毛三山として著名な山であり、信仰の対象ともなっていた。

### 3.3 境界・象徴としてのランドマーク

さらに、ランドマークには絵図の範囲を区切る効果を持つものがある。すなわち、北麓図では浅間山・万座山・白根山・四阿山、南麓図では浅間山・碓氷峠・小諸城、東側からの図では赤城山・日光山・三国峠である。その多くが山・峠である。山よりも外側をほかして境界としている絵図もある。また絵図の端に山や峠を描くことで、絵図の中には描き込むのが難しいそれらの山や峠が象徴する地域を描き入れる効果を持つ。これは日光山（下野国を象徴、[図

3] (c)）、三国峠（越後国を象徴）が当てはまる。山や峠だけでなく、地域それ自体がランドマークの役割を果たしているものがある。例えば [図4] の瓦版では善光寺や江戸（湾）が描かれている（[図4] (c)）。善光寺は実際の被災地からは西側に外れているが、この瓦版を手にする江戸庶民の目からは、信州を象徴するものと映ったであろう。そして、江戸は紛れもなく瓦版を読む者にとっての我々の側の地域である。

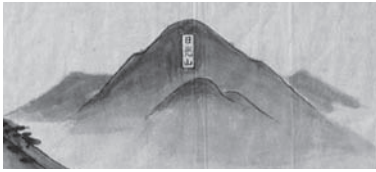


図3 (c) 日光山

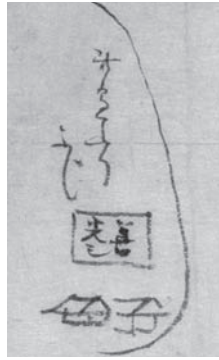


図4 (c) 瓦版に描きこまれた善光寺（左）と江戸（右）

### 3.4 ランドマークの意味するもの

以上のようなランドマークのうち、自然地形について見てみると、吾妻川は浅間山の麓を流れ、利根川に合流する。また、白根山・万座山は温泉地や硫黄の採掘などで知られ、妙義山・榛名山・赤城山は上毛三山として著名な山であり、信仰の対象ともなっている。人工物は街道である中山道および北国街道や大戸道、交通の要所である関所、地域の中心である城下が描かれている。

そして、これらのランドマークは絵図を手に

する人々の居住地を含めることで、絵図のリアリティを増す役割を果たした。また、彼らの必要とする情報—降灰被害なのか、泥流被害なのか、信濃・上野両国内で完結する被害か、利根川流域にかかわる広範囲の被害かによって、被災地として描かれる範囲やランドマークも異なる。絵図中のランドマークは絵図の作成者・閲覧者にとって共通に認識できる記号が選択され描き込まれていたのである。

## 4. おわりに

浅間焼け絵図の構図・ランドマークの分析から次のことがいえる。

(1) 浅間焼け絵図は、噴火・降灰・泥流・復興などの主題により分類できるが、これらの主題は描く範囲・方角・構図との相関関係が見られる。

(2) 浅間焼け絵図は一枚の絵の中に噴火に関する地理的な情報や閲覧者が関心を持つ地域を描き入れることがある。そのため、絵図に描か

れた範囲は実際の地図上の範囲とは異なる。特に広域図の場合、江戸や日光などの象徴的なランドマークを描き入れるため、構図が大きく歪められる。

(3) ランドマークは山、河川、街道、建造物など絵図中の目印として描かれた自然物・人工物であるが、上記(1)と同様に、描く方向によりランドマークが異なる。山や峠のように、ランドマークには絵図の範囲を区切る効果があ

る。また、描かれる範囲の外の地域や閲覧者の居住地を象徴するものがある。これらのランドマークは絵図の作成者・閲覧者にとって共通に認識できるものが選択されており、絵図のリアリティを増す役割を果たした。そして、彼らの必要とする災害情報によって、被災地として描かれる範囲やランドマークも異なる。このように絵図に描き込まれたランドマークは、絵図の作成者・閲覧者にとって共通に認識できる記号として描き込まれていた。

浅間焼け絵図には絵図作成者と閲覧者共通の世界観が成立しており、絵図の範囲・ランドマークの選定にそれが表れている。そして、一枚の絵図にその地理を表現するため、実際に比べて縮尺や方角が歪められていた。写真や地図が事実を再現するのに比べ、人為的な作為が入る絵図については、従来は史実を復元する材料としての信頼性に留保が置かれていた。しか

し、この作為（主観）—絵図の中で何が選択され、捨象されたか、何故にそのランドマークが描かれ、縮尺や方角を歪めてまで、その地域が絵図の中に描き入れられたのか—により、私たちは当時の人々がどのような情報を要求し、どのような情報を伝達させようとしたかを知ることが出来る。そのことにより、当時の人々の災害観や世界観を理解することが出来るのである。

今後は浅間焼け絵図の内容についてより多くの事例を検討するとともに、文献資料・古写真・地図・考古資料との比較を行い、浅間山噴火被害を多角的に復元することが求められる。また、絵図は閲覧の他に、書写されることでも情報が伝達する。今後多くの絵図の事例を集積し、絵図の題名・構図の類似性・相違性から、絵図の系統を復元することで、災害の情報がどのように伝達していったかを考察することが出来るだろう。

## 註

- 1 渡辺尚志『浅間山大噴火』歴史文化ライブラリー166（吉川弘文館、2003年11月）
- 2 萩原進『浅間山天明噴火史料集成 I～V』（群馬県文化事業振興会、1986～88、93、95年）
- 3 大石慎三郎『天明三年浅間大噴火』（角川書店、1986年11月）
- 4 北原糸子「災害絵図研究試論——八世紀後半から一九世紀の日本における災害事例を中心に——」（『国立歴史民俗博物館研究報告』81号、1999年。後に同著『近世災害情報論』（塙書房、2003年5月）に収録）
- 5 渡辺尚志『浅間山大噴火』歴史文化ライブラリー166（吉川弘文館、2003年11月）
- 6 田村知栄子・早川由紀夫「史料解説による浅間山天明三年（1783年）噴火推移の再構築」（『地学雑誌』104（6）、1995年12月）
- 7 この発掘調査の成果については、嬭恋村教育委員会編「埋没村落鎌原村発掘調査概報」（嬭恋村教育委員会、1994年）、浅間山麓埋没村落総合調査会・東京新聞編集局特別報道部編『嬭恋・日本のボンベイ』（東京新聞出版局、1980年5月、最新増補版は1983年2月）等にまとめられている
- 8 成果は群馬県立歴史博物館編『天明の浅間焼け：第52回企画展（会期：平成7年10月7日～11月26日）』（群馬県立歴史博物館、1995年10月）にまとめられている。本稿で言及する絵図も掲載されているので参照されたい。
- 9 成果は国立歴史民俗博物館編『ドキュメント災害史1703-2003：地震・噴火・津波、そして復興』（国立歴史民俗博物館、2003年6月）にまとめられている
- 10 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会編『1783 天明浅間山噴火』（中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会、2006年3月）。以下「内閣府報告書」とする。
- 11 大浦瑞代氏執筆担当
- 12 大浦瑞代「天明浅間山噴火災害絵図における写図の特徴」（『交通史学研究』第70号、2009年12月）

- 13 福重旨乃・馬場章「浅間山火山絵図の類型について」（『民衆史研究会会報』No.64、2007年12月）
- 14 福重旨乃・馬場章「天明三年浅間山大焼絵図」（『関東近世史研究』第65号、2008年10月）
- 15 前掲註13
- 16 「信州浅間焼之図」（公益財団法人三井文庫蔵）
- 17 「浅間焼見聞実記」（東京大学地震研究所蔵）。実際は冊子の5～8丁目に描かれているが、比較の便を図るため本稿ではそれぞれの撮影画像をつなぎ合わせている。
- 18 「浅間焼吾妻川利根川泥押絵図」（群馬県立歴史博物館蔵）
- 19 群馬県立文書館蔵
- 20 東京大学地震研究所蔵
- 21 「浅間山噴火に関する瓦版」（東京大学地震研究所浅間火山観測所蔵）
- 22 「信濃国浅間山大焼絵図」（長野県並木寛氏蔵）
- 23 「天明三年信濃国浅間山焼跡絵図（三）」（公益財団法人三井文庫蔵）
- 24 (a) = 「信濃国浅間山大焼絵図」（長野県並木寛氏蔵）、(b) (c) (f) = 「信州浅間焼之図」（公益財団法人三井文庫蔵）、(d) (g) = 「浅間焼吾妻川利根川泥押絵図」（群馬県立歴史博物館蔵）、(e) (h) = 「浅間山噴火に関する瓦版」（東京大学地震研究所浅間火山観測所蔵）

本稿は、文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（16089203）「わが国における火山罹災地の複合的資料による歴史的・自然景観の復元研究—北関東を中心に—」（研究代表者 馬場章）の一環として行われたものである。

本稿作成にあたり群馬県立歴史博物館・群馬県立文書館・東京大学情報学環図書室・東京大学史料編纂所・財団法人三井文庫・東京大学地震研究所図書室・東京大学地震研究所浅間火山観測所・追分宿郷土館には大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。



福重 旨乃（ふくじゅう しの）

1974年生まれ

【専攻領域】日本近世史

【主たる著書・論文】

「村の合意形成における五人組の役割—武蔵国都筑郡王禅寺村延年間名主役復活運動を事例に」（『法政大学大学院紀要』第57号 2006年10月）

「浅間山火山絵図の類型について」（『民衆史研究会会報』No.64 2007年12月）

「天明三年浅間山大焼絵図」（『関東近世史研究』第65号 2008年10月）

【所属】東京大学大学院情報学環特任研究員

【所属学会】関東近世史研究会、法政大学史学会など

# Changing Composition and Landmarks in the Historical Picture Materials of the 1783 Mt. Asama Eruption

Shino Fukuju\*

## Abstract

Changing Composition and Landmarks in the Historical Picture Materials of the 1783 Mt. Asama Eruption

This paper provides information on and analysis of the collection of historical pictorial materials regarding the Mt. Asama eruption in Tenmei 3 (=1783 A.D.) during the Edo period, focusing not only the subjects but also the drawn perspectives and landmarks.

1) The historical pictures of the Mt. Asama eruption are categorized according to subjects, including the volcanic eruption, volcanic ash, mud flow, and disaster recovery. 2) To embed the geographical information, the historical pictures had transformed their scales differently from the picture maps typically used. In particular, large-area pictures' perspective have huge deformations to include landmarks such as Edo or Nikko. 3) The landmarks in the picture include the historical pictures; the natural sights or artifacts are arranged according to each painter's viewpoint and direction. The areas and landmarks are drawn differently according to each required disaster information. The painters and consumers had shared the same view of the world by designing the scale (including the viewer's location) or landmarks (the chosen common signs) in the published pictorial materials of the Mt. Asama eruption.

In the field of history and geography research, the historical pictures have been given less priority than the photographs or geographical maps to record the historical information. However, the deformation in the historical pictures tells us what kind of information is chosen (or not chosen), why the landmarks are drawn, and why the scale of a map or direction of a compass is transformed. This deformation reflects not only what information people were required to report, but also what the people needed to know. Finally, we can figure out the perspective of those living in the disaster zone and view of the remaining world in those days.

---

\*Interfaculty Initiative in Information Studies, Graduate School of University of Tokyo.

Key Words : Volcano, Disaster Information, Historical Picture Materials, Mt.Asama, Eruption, Japanese History